

## プロジェクト型ビジネス日本語教育の意義と課題

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学文学部紀要編集委員会 公開日: 2020-09-28 キーワード (Ja): ビジネス日本語, PBL, ブリッジ人材, 留学生, シニアサポーター キーワード (En): 作成者: 堀井, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1360">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1360</a>

# プロジェクト型ビジネス日本語教育の意義と課題

## Effects and Issues of Business Japanese Education by Project Based Learning

堀 井 恵 子

キーワード：ビジネス日本語、PBL、ブリッジ人材、留学生、シニアサポーター

### 1. はじめに

近年の日本企業のグローバル化などに伴い、国内外で日本語を使って仕事をする外国人が増加し、仕事をスムーズに遂行するためのビジネス日本語教育のニーズが高まっている。また、主にアジア地域からの留学生を、企業からのニーズの高い、自国と日本の両方に精通し橋渡しとなることのできる「ブリッジ人材」として活用するため、外国人留学生の日本企業への就職を支援するアジア人財プログラムが構想され、平成19年度からその実施に入っている。平成20年に骨子が出された留学生30万人計画においても留学生の雇用の促進が期待されている。筆者は上記アジア人財構想に関する「日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究」<sup>1</sup>（以下、「調査研究」）の検討委員として調査に関わり、また、アジア人財資金構想共通カリキュラムマネジメントセンター事業委員としてこの構想で使用する教材作成を担当してきたが、留学生が日本・日系企業に就職し仕事をしていくために必要な能力を育成するためにはProject Based Learning<sup>2</sup>（プロジェクト型学習、以下PBL）が有効であろうという委員会の提案に基づき、プロジェクト型ビジネス日本語教材をチームで開発、勤務校のビジネス日本語教育で3年ほど授業実践をしてきた。本稿では2008年9月から2009年7月の間の2期にわたるプロジェクト型ビジネス日本語教育の授業実践を、学習者の授業振り返りシートの記述を分析・考察し、その意義と課題を探る。プロジェクト型ビジネス日本語教育に関する研究はまだ少ないので、本稿がその一助となれば幸いである。

### 2. 留学生に対するビジネス日本語教育に求められるもの

上記「調査研究」から導かれた「外国人留学生向けの研修のあり方について」<sup>3</sup>では、外国人留学生が就業するために必要な能力として以下をあげている。

①ビジネス日本語能力（大学で習得した日本語能力に加え、ビジネス場面で使用頻度が高い日本語能力の更なる向上）：相手との関係/場面/目的に応じて適切に使い分けるコミュニケーション

ン能力（社内/社外・上司/同僚）、会議や打ち合わせといったビジネス場面で使用される敬語や丁寧語などの待遇表現、電話対応・メール等「非対面型」コミュニケーション能力、日本語でのビジネス文書読解力及び作成能力（報告書、企画書、仕様書など）

- ②ビジネス文化・知識への理解（日本文化/社会に対する一般的知識に加え、ビジネス文化/知識への涵養）:日本企業特有の習慣/文化/特質、社内の上下関係/チームワーク/コミュニケーション、顧客サービス志向、ものづくりに対するこだわり精神、コスト意識、企業を取り巻く社会状況、経済状態
- ③グローバル人材としての能力:外国人留学生が持つ異文化対処能力の活性化、永住or帰国など、居住地に関する意識、日本で就職する意義、日本企業特有のキャリアパス、スキルマップへの理解
- ④社会人としての行動能力（社会人基礎力<sup>4</sup>）の養成（日本企業で働く社会人を意識した行動能力の向上）:協調性、プロジェクト管理能力、規律意識、ロジカルシンキング、論理性、チームワーク力、情報収集/集約力、プレゼンテーション能力/説明能力、人間関係を円滑にするコミュニケーション能力、ビジネススキル・マナー

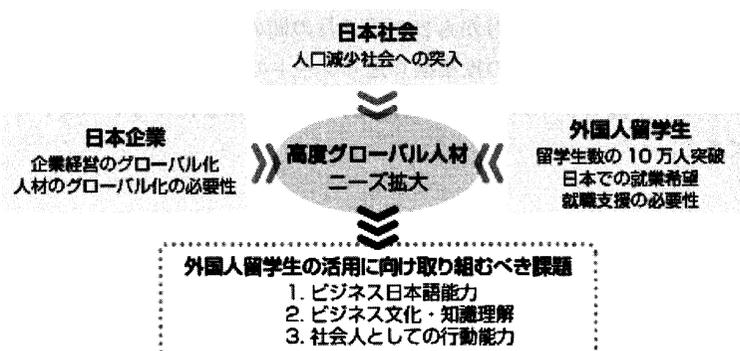
### 3. PBLで育成することのできる能力

そして、アジア人財資金構想の共通カリキュラムコンセプト<sup>5</sup>には、以下のように、上記能力を育成するためにPBLが効果的であることが述べられている。

.....

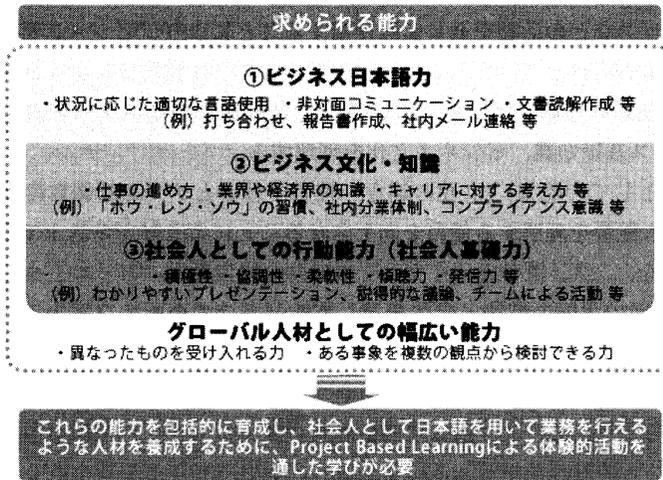
外国人留学生が日本の産業社会で必要とされる総合的な能力をProject Based Learningで身につけることで、学内教育から企業内教育へのソフトランディングを目指します。

平成18年度経済産業省委託事業「日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究」での、企業および日本の大学・大学院出身の外国人社員に対する調査から、外国人留学生が日本企業で働く上で克服すべき課題として、以下の点が明らかとなっています。



年々増加する社会ニーズに対応するため、外国人留学生が就学中に取り組むべき複数の課題の解決策として、Project Based Learningが最適であると共通カリキュラムマネジメントセン

ターは考えました。



語学教育における Project Based Learning の特徴としては、以下の点が挙げられます。

- 学習者の言語学習の目的が、語学そのものではない
- 言語は一義的には道具である
- 「学べき対象」を「その言語」で学び、その過程で必要なスキルが結果として学習される

今回のアジア人財資金構想では、単に言語能力だけではなく、日本社会で活躍するための活動能力を身につけることが必要ですから、Project Based Learning による統合型学習は、事業の主旨に沿った効果・効率的な研修プログラムと考えられます。

.....

PBLは「学習者が自分達で話し合って計画をたて、実際に教室の外で日本語を使ってインタビューや資料集め、情報集めなどの作業を行い、作業の結果を持ち寄って一つの制作品（報告書、発表、ビデオなど）にまとめる学習活動」<sup>6</sup>であるプロジェクトワークをベースにした学習法である。

PBLでは、必然的に実際使用場面が多くなる。調査、インタビュー、ビジターセッションを通して、さまざまなインターアクションが行われ、上記2で必要とされている「場面・目的に応じて適切に使い分けるコミュニケーション能力、電話応対/メールなどの「非対面」コミュニケーション能力、ビジネスレター作成、プレゼンテーションや会議などの複合的なコミュニケーション能力（待遇表現を含む）、そしてビジネススキル/マナー」を育成することができる。また、PBLではチームによる作業が多いので、チームワークも養われるし、プロジェクト達成のためには、なによりも学習者自らが問題点を発見し問題解決をしていくことが必要とされる。

以下、PBLで養成できる可能性のある能力を「調査結果」からの「求められる能力」にそってあげる。

- ①ビジネス日本語能力: ビジターセッション、シニアサポーターの参加、インターネットや参考文献からの情報収集、教室外での観察、インタビュー/アンケート調査、外部評価を入れたプレゼンテーションなどの活動を通し実際使用することにより、ビジネス日本語の総合的実践運用能力を養成する。
- ②ビジネス文化・知識の理解: ビジネスコンテンツと外部とのインターアクションなどにより(日本の)ビジネス基礎知識、ビジネス文化を理解する。
- ③グローバル人材としての能力: (文化の違い)他の学習者とチームを組んで協働作業を営む能力や自己を表現し他者を理解する能力を向上させることによりビジネス上で起こる問題を調整する能力をつける。
- ④社会人基礎力: 毎回の課題の解決、全体を通してチームでの企画の立案・達成をすることで問題発見解決能力、自律学習能力、チームワーク力が高まる。

#### 4. 授業実践

筆者の所属する武蔵野大学大学院には人間社会・文化研究科言語文化専攻に2006年度よりビジネス日本語コース<sup>7</sup>が開講されている。

ここでは、現在、上記「調査研究」で必要とされている能力に堀井(2009)で得た結果である、問題発見解決能力、異文化調整能力の育成を加え、以下の科目でビジネス日本語教育を行っている。

##### ①(ビジネス)日本語科目群

ビジネス日本語演習1～4 12科目(口頭表現、情報収集(読解)、文書作成、総合)  
ビジネス日本語情報処理

##### ②ビジネス科目群

日本企業概説(企業戦略、人材活用)  
日本ビジネス特別講義(マーケティング/アカウンティングの基礎を含む)  
企業文化研究(業界分析)  
インターンシップ事前研究  
インターンシップ

##### ③課題研究科目群

ビジネス日本語ゼミ  
特定課題研究演習  
特定課題研究成果

そして、ビジネス日本語演習4(総合)ABにおいてPBLを用いた授業を行っている。ここでは、2008年後期と2009年前期に行った2期の授業実践について、授業各回の学習者の振り返りシート、ならびに、各期末の学習者のふりかえりの記述を分析し、考察する。

## 4.1. 授業実践 1

### 4.1.1 授業の概要

学習期間：2008年9月—2009年1月

学習者：大学院ビジネス日本語コース2008春生Bクラス 22名（全員中国、男6名、女16名）

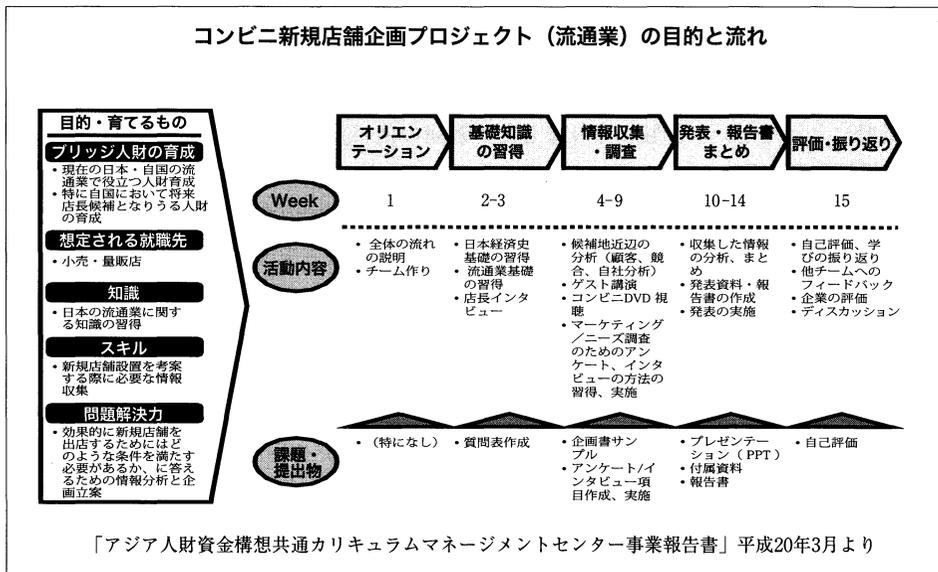
学習者の日本語レベル：入学時日本語能力試験1級またはそれに相当する日本語力を有する

### 4.1.2 使用教材と授業の流れ

教材には、アジア人財資金構想カリキュラムマネージメントセンター開発教材として武蔵野大学チームで開発した「コンビニ新規店舗企画プロジェクト」を使用した。

下図のように、このプロジェクト型教材では、流通・小売り業におけるブリッジ人材として必要な知識・スキル・問題解決能力の育成を目的に、15回の授業を展開している。

コンビニは多くの留学生にとっては毎日のように行くところでもあり、場合によってはアルバイトもしている身近な場所。一方、コンビニ業界は競争が激しく、また、小回りが利くため流通業の中でも先端的なさまざまな手法が取り入れられている。留学生の母国との対象としても興味を持って、ビジネスチャンスも考えやすい。そもそも、教材開発時の調査で、ある流通業のトップから「今後中国にコンビニを100店舗展開する予定がある」と聞いたことから、留学生にとって実際の就職の可能性もあるのではということから、開発した教材である。



第1回のオリエンテーションでは、戦略的自我介绍、チーム作りをしながら、コンビニクイズで興味を喚起したり、宿題の「コンビニで売っている面白いもの・サービスベスト10」をまとめることで観察を促す。第2回では流通業の基礎知識を学ぶとともに、宿題では複数のコンビニの比較をする。第3回ではコンビニ業界の人事担当者の講演に備え、コンビニについての知識を学ぶとともに、講演者のプロフィール調査や質問の仕方などを学び、第4回では講演を聞き、質疑をし、講演のレポートをまとめる。第5回でさらに具体的なコンビニの仕事を理解した後、コ

コンビニ店長インタビューの練習をし、宿題で実践（アポとりを含む）。第6回ではインタビュー報告、フランチャイズについての理解、そして特殊立地についての情報収集。第7回で情報収集の仕方と3C分析の理解、第8回では「コンビニの中国進出」に関するDVDを見てタスクに答える。第9回では新規店舗企画調査のためのアンケートを作成し、アンケート調査に出かける。第10回以降は、調査結果を分析、企画案を立て、プレゼンテーションの仕方を学び、準備をし、プレゼンテーションに来てもらうビジネスパーソンへの招待状を作成送付、そして、新規店舗企画のプレゼンテーションをして自己/他者評価で終わる。

#### 4.1.3 学習者の学び

クラスで5つのチームに分かれ、最終的には特殊立地のコンビニ新規店舗企画のため、それぞれが高速道路のパーキングエリア、遊園地、病院、東京駅地下、海岸に実地調査に出かけリサーチをした。クラスには学部での専攻が日本語・日本学だけでなく、経営、情報など様々な分野の者がいるのでそれをいかし、また、インタビュー上手、調査好き、分析好き、PPT上手、発表上手など各自の得意な役割分担でのチームワークとなった。ゲストを招いての発表では就職につながるシーンも登場した。

学習者の各回のふりかえりシートの記述の中から、学習者の気づきをあげる。

- ▼講演を聞いて、企業の変革について多くのことに気づくことができた。
- ▼服装の準備からアポイントの取り方まで、全部自分で計画を立てなければなりません。電話をかけた時の緊張感、許可を得た時のうれしさ、インタビューをした時の緊張など、今後の就職活動にとってもいい経験になりました。敬語の使い方、ビジネスマナーの重要性を改めて感じました。(店長インタビュー)
- ▼アンケートを取るためにはどうやってデータを収集すればよいか、質問文の表現、質問の順序、回答形式の大切さなどがやってみてやっとわかった。
- ▼グラフを使えば説得力が増し、より伝えられることがわかった。(企画案)
- ▼初めの間違いだらけの企画書から最後こんなに完成されたものになるとは思わなかった。
- ▼招待状に何が必要か、皆で考えた。地図も必要だし、来てもらうためには熱意を伝えることも必要だ。
- ▼プラスだけではなくマイナスも出す必要がある。(プレゼンテーション)
- ▼「とりあえず」「結構」は誤解されることがわかった。(プレゼンテーション)
- ▼総司会をすることで人前で話すことが怖くなくなった。(プレゼンテーション)

また、期末のふりかえりでは、

- ▼流通業の基礎知識、コンビニについて、フランチャイズについて、POS、3C分析など多くの知識を得た。
- ▼インタビューやアンケートで生の声を聞くことができた。
- ▼学んだ知識を活かして実際にグループワークで現地調査を実施し、各自の企画を提案するまで行うことにより、机上の空論ではなく、実際の応用能力を鍛えることができた。

- ▼ある企画を立てるためには、計画を立て内容の一貫性を保つために様々な角度から見つめていかなければならないことに気付いた。
  - ▼他のチームの発表を聞いてとても参考になった。お互いのチームの実現性についてディベートができておもしろかった。チームでプレゼンについていろいろ議論し、一人で思いつかないアイデアがどんどん出てきていいプレゼンにつながった。チームでぶつかる場所もあったが、一人一人の得意分野で役割が決まって最後までいいプレゼンができてすごくやりがいがあった。
  - ▼自分とまったく違うタイプの人とチームになることによって社会に出てから色々な人と一緒に仕事することに自信が持てるようになった。
  - ▼実行能力が向上した。インタビューを通して、コミュニケーション能力が向上した。アンケート調査から企画書に至るまでチームワーク能力を発揮することが出来ました。今後、自分は中国に出店する可能性があるので役に立ちます。
  - ▼自己学習能力が上がったということを感じました。先生から何の課題を与えられても、資料探し、調査、分析、結論などを自分でできるようになりました。
  - ▼クラスの皆が活発だった。
  - ▼2年間コンビニのバイトをしていたが、このようなことはちっとも知らなかった。
  - ▼他の授業で学んだことをこの授業で活用できた。
- など、特に、チームワーク、実行力、自己学習能力、考える力が身に付いたという気づきが多かった。

#### 4.1.4 考察と課題

このように、このプロジェクト型ビジネス日本語教育によって、ビジネス日本語能力の育成、ビジネス文化・知識の理解、社会人基礎力について総合的に育成する大きな可能性があることがわかったが、一方、プレゼンテーション時における外部ビジネスパーソンの評価から、以下が課題として浮かび上がった。

- ①企画のリアリティのためには、採算を考える必要がある。
- ②異文化調整能力の育成のためにはチームに日本人が入っているとよい。

## 4.2 授業実践2

次の授業実践においては、上記の課題を改善することも併せて実践を行った。

### 4.2.1 授業の概要

学習期間 2009年4月—7月（90分×12回/15回）

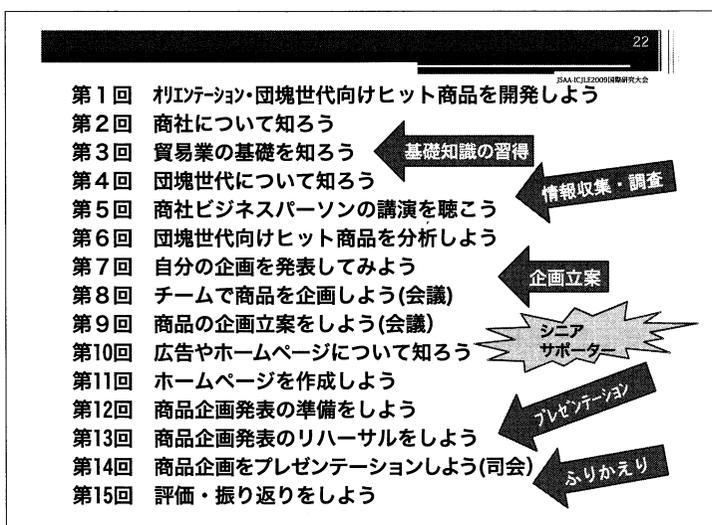
学習者：大学院ビジネス日本語コース春Aクラス、23名（中国、韓国、台湾、香港、男6名、女17名）

日本語レベル：入学時日本語能力試験1級またはそれに相当する日本語力を有する

#### 4.2.2 使用教材と授業の流れ

ここでは、アジア人財資金構想カリキュラムマネージメントセンター開発教材として同じく武蔵野大学チームで開発した「団塊世代向け商品企画プロジェクト」を使用した。春入学の学習者にとってはこの期の授業が入学後最初に行うものであるため、内容もこの教材のほうが少し難度の低いものである。

このプロジェクト型教材では、貿易業におけるブリッジ人材として必要な知識・スキル・問題解決能力の育成を目的に、15回の授業を展開している。団塊の世代を焦点にすることで、日本経済の流れを身近な視点で見ながらヒット商品の要素についても考える。15回の授業の流れは以下である。



今回は、前回の課題改善のため、かねてから養成していたシニアサポーター<sup>8</sup>にこの授業に入ってもらった。シニアサポーターの多くは元気な「団塊の世代」でもあった。

なお、学習者には、堺屋太一『団塊の世代』を3週目までの必読書とした。

#### 4.2.3 学習者の学び

期末の質問紙による調査の回答を集計、「調査研究」の項目に合わせて記述を分析した結果、以下の項目が挙げられた。ここでは、記述量の多かった項目から挙げる。

##### 1. 今回のヒット商品企画とプレゼンテーションを通して、今までと比べて、どのような力がついたと思いますか？

###### 1) 社会人基礎力

###### 1-1) アイデアを出したり、それを練るなどの考える力

▼チームで話しあったり、他のコメントをもらうことでいろいろな発想が出てきた。

###### 1-2) 情報を収集したりPPTにまとめたりする行動力・実行力

▼企画のために積極的に情報を集めた。

1-3) チームワーク

▼プレゼンの準備から発表まで何週間もチームメンバーと一緒に勉強して成長できて本当に良い経験となった。チームで取り組んで楽しかった（多数）

2) ビジネス日本語能力

2-1) 口頭表現力：会議などの司会、まとめ、議論をする力

▼会話練習のときは棒読みで発表していたが、自然に自分のことばとして述べられたのがうれしかった。

▼シニアの方がいらっしゃったので常に日本語を使わざるを得ないことがよかった。

▼シニア方にはできるだけ敬語を使おうと頑張った。

2-2) 「非対面型」コミュニケーション能力：電話対応/Eメール等の使用

▼よくメールでチーム内、サポーターと意見交換をしたので、十分使えるようになった。

2-3) ビジネス文書読解（参考文献/インターネットでの情報収集含む）

▼今回の活動を通して多くのビジネスに関する知らないことを知った。

2-4) 文書作成能力（IT技術を含む）：報告書、企画書、プレゼンテーションなど

▼今までプレゼンをやったことがなかったので良い経験になった。

▼これまでPPTを実際のプレゼンに使ったことがなかったが、やってみてとてもよくできるようになった。

▼プレゼンの流れ、構成が詳しくわかった。

3) (日本の) ビジネス文化・知識の理解

▼団塊世代と日本の戦後経済の流れについては、はじめて学んだがよくわかるようになった。

▼大学3年の時、200人の教室（中国）で団塊の世代の話聞いたが何も覚えていない。

▼堺屋太一『団塊の世代』を読んだ上でのプロジェクトだったので深さが出た。

▼シニアサポーターの方がいたので、団塊世代の生の話が聞けた。

4) ビジネスマナー

▼他の授業で学んだことが役立った。

▼公の場での言葉遣い、しぐさなどが身についた。

▼スーツを着ること、名刺の渡し方、発表するときの姿勢などを学んだ。

▼質問の仕方、司会の仕方などとあわせて、たくさんのビジネスマナーを身につけた。

2. このようなプロジェクトワークによって、ビジネス日本語の総合力がついたと思いますか？

はい・・・23名全員

▼確実に向上したと思う。かなり向上したと思う。

▼ずいぶん鍛えられた。

▼考える力、言語力、実行力がついた。また協調性もついた。

▼責任感が出てきた。

▼他の考えを尊重しながら、いい企画のためにいろいろ工夫した。

▼説得力、問題発見力が進歩した。

▼就職活動に役立つと思う

3. 今回のPBLのよい点、課題となる点をあげてください。

- ▼もっと留学生であることを活かす企画を考える必要がある。
- ▼積極的な人とそうでない人の中で問題がある。
- ▼他の授業で学んだことをここで活かすことができた。
- ▼学んだことを実際に使うことができた。
- ▼さらにこの方法で勉強したい。

以上、学習者の振り返り記述から、プロジェクト型ビジネス日本語教育によって、社会人基礎力、口頭表現やプレゼンなどの狭義のビジネス日本語能力、ビジネスマナーが向上し、日本のビジネス文化・知識の理解が進んだことがわかった。また、総合的な力がついたとして、学習者の評価が高かった。

なお、今回はシニアサポーターが各チームに入って一緒に企画したことから、企画のリアリティが増した。また、異文化調整能力養成の可能性も見えてきた。

- ▼経験が少ないので、初めは非現実的なアイデアだったが、シニアサポーターのアドバイスによって現実的なものとなった。シニアサポーターの参加については、
- ▼ターゲットの絞り方、セールスポイントの出し方などを指摘してもらった。
- ▼自分の誤解がサポーターの指摘で訂正された。
- ▼企画の中で日本人の視点でなければ気づかないことが見えてきた。
- ▼日本人の視点、日本人はどう思うかなどが自然に伝わった。
- ▼日本人の見方で中国人のプレゼンがどう見えるかが勉強になった。
- ▼頂いたたくさんの意見がとても役に立った
- ▼いろいろ相談を聞いてくれ、遅くまで付き合ってくれました。

などがあがっている。なお、シニアサポーターの効果については、別途改めて、詳細に調査分析し、結果を発表する予定である。

## 5. おわりに

授業実践1、2の学習者の振り返り記述から、プロジェクト型ビジネス日本語教育によって、社会人として日本語を使って業務を行うために必要な能力である、ビジネス日本語能力、ビジネス文化・知識の理解、社会人基礎力などについてはある程度育成されることがわかった。

今後の課題としては

- ・PBLについては、半年スパンの比較的少人数のクラスが効果的であるがそれが難しい場合がある。

- ・使用することによる教材・教授法の改善。
  - ・日本語教師ができることと、他の協力が必要なことを見極め、日本語教師がコースをコーディネートをしていくスキームづくり。
  - ・シニアサポーターの育成・活用。
- がある。

21世紀の社会のニーズの高い国と国の間から新たなものを生み出すことのできる真のブリッジ人材、そしてグローバル人財の育成については、まだ多くの研究を必要とするが、プロジェクト型ビジネス日本語教育がさらに質の高いものとなっていくよう、実践と研究を積み重ねていくことで貢献していきたい。

- \*本研究は、日本語教育学世界大会2008（釜山）における発表「プロジェクト型ビジネス日本語教育の意義と課題」、ならびにJSAA-ICLJE国際研究大会（2009、シドニー）における発表「プロジェクト型ビジネス日本語教育の意義と課題2」に大幅な加筆修正を加えたものである。
- \*特記：本研究は文部科学省科学研究費補助金（平成20-22年度）基盤研究C課題番号20520480「留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育の教材・教授法開発のための調査研究」研究代表者（堀井恵子）からの助成を得ている。

#### 【注】

- 1 海外技術者研修協会「日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究」報告書 平成19年3月
- 2 問題設定解決型学習法
- 3 経済産業省産業人材参事官室「外国人留学生向けの研修のあり方について」2007
- 4 経済産業省「社会人基礎力—共通言語化に向けて」平成18年9月
- 5 <http://www.aots.or.jp/asia/curriculum/index.html>
- 6 田中幸子他著（1988）『プロジェクトワーク』凡人社
- 7 武蔵野大学：<http://www.musashino-u.ac.jp/nyusi/daigakuin/course/business.html>
- 8 武蔵野大学生涯学習講座「大学の留学生をサポートするためのボランティア講座」受講生の中から希望者を募りシニア・サポーターとしている。

#### 【参考文献】

- 海外技術者研修協会「日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究」報告書 平成19年3月  
経済産業省産業人材参事官室（2007）「外国人留学生向けの研修のあり方について」  
堀井恵子他（2007）『BJTスコアアップ模擬テスト』アルク  
堀井恵子（2007）「留学生に対するビジネス日本語教育の現状と課題—産学連携の実現にむけて」『武蔵野大学文学部紀要』第8号 pp.1-14  
堀井恵子（2008）「留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育に求められるものは何か」『武蔵野大学文学部紀要』第9号 pp.1-9  
堀井恵子（2009）「留学生に対するビジネス日本語教育のシラバス構築のための調査研究」『武蔵野大学文学部紀要』第10号 pp.78-90